



円山動物園 「今昔物語」

円山動物園の60年

昭和26年5月5日、北海道初、全国10番目となる円山動物園はヒグマ2頭・エゾシカ1頭・オオワシ1羽からスタート。



▲開園当初のヒグマ

その後、展示動物の充実と施設の整備が進み、市民の憩いの場として発展。昭和49年には年間入園者数が過去最高の124万人を数え、北海道を代表する動物園として親しまれてきました。

しかし、平成に入り、娯楽の多様化や施設の老朽化などにより入園者数が減少。平成17年には年間49万人にまで落ち込みました。

その後、施設の新設や「ドキドキ体験」の実施など職員一丸となって動物園の魅力向上に取り組み、1昨年は92万人、昨年は83万人と入園者数も大きく回復しています。

このたびは開園60周年にちなみ、4代目園長の金田寿夫さんと12代目の現園長酒井裕司さんからお話を伺いました。

金田さんがいた時代

金田 私は昭和39年に獣医として採用されました。当時11〜3月は閉園していましたが、昭和41年の冬期間園に向けた熱帯動物館の建設など活気がありましたね。

酒井 資料によると、当時は開園日1日当たりの入園者数が、上野・東山・天王寺に次いで全国4位です。

開園期間を延長した分、年間入園者数は増加するはずですね。

金田 ところが年間入園者80万人の1割しか増えませんでした。

酒井 冬期の入園者数を増やすというのは当時からのテーマなんです。

今年はお正月も雪まつり運動

酒井 今年の雪まつり期間中は入園料を無料にし、園内に大きな滑り台も作りました。

この1週間で約3万2千人が来園し、アンケートではイベントより動物観賞の方が楽しかったという結果でした。冬の動物園を知ってもらおう良い機会になったと思っています。

動物園の役割とは

金田 昭和48年に北アメリカの17都市38カ所の動物園・水族館を視察し、動物園の役割や園内の造園、飼育技術、動物舎の構造などを学びました。動物園先進地の欧米では、動物園をレクリエーション、教育、調査・研究、自然保護と4つの役割を持たせ、特に教育と自然保護に力を入れていましたね。

そういった要素を取り入れ、子ども動物園の拡張と動物科学館の建設をし、子どもの環境教育にも力を注ぎました。

酒井 レジャー施設から教育の場への転換期とも言えますね。

金田 視察ではホッキョクグマの繁殖についても話が聞きました。おかげで昭和60年に円山動物園では初めて繁殖に成功しました。

酒井 ここ数年は繁殖の可能性を高めるために、複数の動物園同士で動物を貸し借りする「ブリーディングローン」を活用しています。

初めの頃は親しみのある動物が園を離れるのは寂しいという意見が多かったのですが、最近は市民の皆さんにも「種の保存」に対する理解が深まってきているようです。

金田寿夫



かねた ひさお

1933年（昭和8年）生まれ。円山動物園4代目園長として昭和60年7月から平成3年3月まで在任。環境問題にも明るく、現在は札幌市環境保全アドバイザーを務める傍ら、アニマルスクール講師として後進の指導を行っている。